

岡崎での焼き物・陶芸

岡崎女子短期大学

名誉教授 影山 捷司



影山でございます。今はもうはげ山になってしまいました。

岡崎との縁は深く、大学は今の明大寺の丘、愛知学芸大学と言われる頃の卒業です。その頃は絵に情熱を注いでいました。在学中に岡崎市民展では県知事賞をいただき、豊橋市民展でもいただきました。公募展は春陽会に出品していました。

岡崎女子短大が出来て間もない頃、本多さんという大変癖の強い肉食系男子に呼ばれまして、岡崎へ通うようになりました。その頃は若さだけありました。自分の家もない、奥さんもない、何もありませんでした。今は一応有りますが、髪の毛は少なくなりました。

あと29年仕事する予定で頑張っています。29年というと、春陽会の先輩で文化勲章までいただいた中川一政という先生。その先生が生きた年です。それよりも越しちゃあ悪いと思い100歳前と考えています。98才まで使えるように原材料を準備しています。今、絵も描いていますが、市民の皆さんとの関係においては陶芸です。案内状をおくばりしましたが、岡崎信用金庫の資料館でクラブにきている会員の皆さんの作品を展示しています。

陶芸をやるようになったのは何故か。大学のお陰なんです。大学っていうのは本当に良い世界でして、あまり風も吹かず、いじめられることもない。給料はちゃんと家へ持っていける。勉強するには大学から研究費というのが出る。その研究費で大学の指定した研究じゃなくて自分が好きな研究がやれる。情報も何年もたちますと結構貯まって来ます。釉薬や土などの材料が貯まりまして、私のマイホームには入りきれない量になっていました。退職したのを機に本宿町、青い鳥学園の横の山野辺に工房を作りました。退職金全部そちらへつぎ込みました。

今日するお話は、岡崎の陶芸ということです。岡崎で有名なのはかぶとやまやきです。甲山焼(かぶとやまやき)なのか甲山焼(こうざんやき)なのか困っちゃいました。私の調べた本では甲山焼(かぶとやまやき)。市で出してる岡崎市史。それから三井家(三井財閥)の文書です。この2つの文書では

甲山焼(かぶとやまやき)。甲山会館のすぐ上、駐車場の上になりますが、あの道のところに看板が出ています。市で作った看板です。それには甲山焼(こうざんやき)と書いてあります。お寺は甲山寺(こうざんじ)。神社は甲山(かぶとやま)八幡宮。お寺の読み方は殆どが音読みですね。甲山会館(こうざんかいかん)、甲山中学(こうざんちゅうがく)、甲山(こうざん)です。だから甲山焼(こうざんやき)でも差し支えないとも思います。甲山焼(かぶとやまやき)という認識の方、甲山焼(こうざんやき)という方、どっちが多いでしょうか？ 挙手をお願いします。甲山焼(かぶとやまやき)の方。(挙手) 甲山焼(こうざんやき)の方。(挙手) 挙手の結果は甲山焼(こうざんやき)が7割でした。だから事実が甲山焼(かぶとやまやき)であっても現実には甲山焼(こうざんやき)に変化しているということです。

くいちがいには素人でなくてプロの世界にもあります。陶芸というのは何か？ 土を焼くことなんです。土を焼くとどうなるか？ 土が硬くなるということです。どんな土が良いか？ どんな焼きが良いか？ まさにその歴史なんです。土はどこにあるかということですね、皆さんの家の庭の土も多分良い土でしょうね。そこから深く掘っていてもあるでしょうね。ただどのような土がどれぐらいあるかという問題があると思います。大西政太郎という京都に大変良く勉強された先生がいます。先生の著書「陶芸の土と窯焼き」の初めにはこんな出だしで書いてあります。昔の陶工は「1に土、2に焼き、3に細工と作陶のあり方」を示しています。土は焼き物の主原料であり、焼きは加工であるということが出来ましょう。このような出だしです。これは普通に言われている、どの本にも書いてあることです。それを信じていました。NHKに陶芸作家を訪問する番組があります。それを文章にして本にしてあります。本にするについてはその作家、訪問した人、その他の人の検閲を経て出版されているわけです。鈴木藏さんという美濃の人間国宝になっている志野を焼く先生。先生の言われているのを文章にしています。「1に焼き、2に土、3に細工」、1と2が入れ替わって

います。鈴木さんは昔からそういうように言われていると言ってるわけです。その真意の程はわかりませんが、私の想像では鈴木先生が一生懸命で焼きに心血を注がれていて、そのうちに1と2が入れ替わったと思います。

荒川さんとか加藤唐九郎さんとか大変有名な志野の方がいました。彼らの二人の功績は何だったろう？ 桃山志野の復活です。どのように復活したかというとその時代に焼いたような窯を作って、そのような時代の方法で一生をかけて焼いたのです。荒川さんの発想になったのは昔の茶碗じゃなくて陶片ですね。それを古い窯あとから見つけたということです。それを自分の窯で焼いてみた結果、火色が戻ってきて上手い具合に焼け、焼きでやれるんだなと思ひ頑張りました。

鈴木藏先生。お父さんも陶芸で頑張っていました。お父さんの時代には石炭窯で焼いていました。その時代にも志野が焼けていました……。藏氏は、志野を焼くには現代の方法があるんじゃないかと、穴窯に限らずガス窯で焼くことを考えました。今の陶芸のほとんどはガス窯です。ガス窯で焼きました。どうやったら綺麗な色が出るか？ まさにその挑戦なのです。何回も窯を作りなおしました。作品の量に対して窯の壁を厚くしていきました。厚くすることによって火を焚くのに時間がかかります。ガスが沢山要ります。そういう窯ですから冷めるのに時間がかかります。ゆっくり冷めるようにどう工夫したか？ 窯の周りをスペースシャトルに使うような断熱材で固めました。ひとつひとつの作品はさやと言う別な容器に入れて焼きます。そうすると一度にくつも焼けない。それは経済性を考えるんじゃないで、良い作品を作るのが目的です。鈴木先生の作品の値段はどれぐらいか？ 最近セラミックパーク美濃で展覧会をやっています、作品は売っていました。抹茶茶碗が500万円でした。500万円と言えば高額ですが、それが高いのか安いのかどうなのでしょう？ 彼が一生懸命ろくろを挽きます。挽いたのを棚に並べて置く。形の良くないのはもう次の素焼きも何もやらないで潰しちゃう。素焼きをして釉薬をかけて、時間をかけて焼く。焼き上がったものの中から良いものだけを選んでいく。このひとつひとつが頂点であってこの下に沢山の作品があるわけです。

陶芸作家の多くは自分の作品では生活が成り立たない人が多い。運良く窯が親の代からあって職人がいて流通ルートがあって、窯場の主人としてやれる。その主人さんが名を上げると、他の普通の製品まで高く沢山売れる。頂点は大事なことなんです。焼き

物の産地があります。その窯場からその地域からいわゆる無形文化財・人間国宝さんの出ているようなところは景気が良いですね。

岡崎へ来ていました永楽さんは、京都では第一級の陶工です。京都で一級という事は日本で一級という事です。彼が来ていたのですからかなりの刺激が岡崎にあったんじゃないか。永楽さんの技術には凄い幅があったので現代まで残っているものも何かあるんじゃないかと思ひます。どのような形であるだろうか？ 明治から大正、昭和の初めにかけて簡単に焼ける楽焼、ちょっと余裕のある人達がやっていたのではないか？ だから明治、大正に焼かれた楽焼の茶碗というのは皆さんの家にも残っているんじゃないか？ と思ひます。永楽さんのやったのは何でも屋です。幅広く何でもという感じでやりました。

現代というのは専門化が進んでいます。何々の文化財指定になっていくわけです。常滑でしたら山田常山さんの急須。荒川さんと加藤さんのふたりが古典的な窯で一生懸命焚きました。松の木を燃料に使いました。松の木は油がありますから火力が強いです。沢山要ります。今松の木で窯焚きをやろうとしたら大変です。結構経費がかかります。鈴木藏氏はガス窯にこだわっています。それからもうひとり森

陶缶という方を聞いたことありますか？ 備前の作家です。窯でいったらこの人の情熱が1番凄いです。備前の土、釉薬をかけないでそのまま焼きます。彼は昭和61年に長さ53メートルの窯を作りました。幅も結構あります。それに大きな壺、人の入れるような大きな壺を焼きましたが、ほとんどが割れてしまいました。昭和61年から色々工夫しまして20年かけて、全部じゃありませんがあまり割れないような焼きが出来るようになりました。焼き方、冷まし方、それによって変わってくるわけです。25人の人達が3交代で53日間延々と炊き続けました。どれぐらいの薪が要るんでしょうね。薪を使って焼くのは大変なことでしょう。瀬戸は日本一の焼き物産地でした。この間万博がありました。自然保護と騒いだのが海上の森です。重油とか石炭が入ってくる前、全部薪で焚いてました。恐らく海上の森の山は木1本もないという程切られていたはず。あそこだけじゃあ足りずにもっと遠くの山の木も切られていたと思ひます。それから新しく生まれたのが海上の森。自然保護思考はありませんでした。生活に一生懸命でしたね。

瀬戸がいつでも良かったわけじゃありません。その歴史を考えていく時に、土が大切なのです。土が元々どこからきてるか？ 山の土なんですね。山ですから雨が降れば土を含んだ水がどちらかへ流れる

でしょう。瀬戸のところにある大きな山ご存知？
そう猿投山です。瀬戸の方へ流れる水があります。それから南へ流れるとどうなります？ あの猿投、豊田方面ですね。瀬戸方面には東海湖という大きな湖がありました。この東海湖、ここへどんどんどんどん猿投山の土が流れ込み、溜まっていきます。これが瀬戸・多治見の土。同じ土はこんど豊田の方へも流れて行きます。ただこちらには大きな湖はなく、小さな池がありました。瀬戸が栄える以前に猿投古窯が発達していました。同じように、三重県と滋賀県の間には山があります。西へ流れた地は信楽ですね。東へ流れた土で作られたのが伊賀焼です。それで骨董品を扱っている人が、伊賀焼か信楽焼かわからないと云う。要するに土は同じような質になってくるわけです。ともに日本を代表する土の良く取れるところ、信楽それから瀬戸・美濃。土がありますからそこで産業が起きました。山の方ですと燃料もあるから都合が良いですね。

岡崎はどうでしょうか？ 大量の粘土はありませんが、捨てたものではないですね。花崗岩。粘土になる1番良い母岩が花崗岩と云われます。これともうひとつ流紋岩と言われる岩が良いと云われています。花崗岩と流紋岩、何が違うんだって？ 岩の中に入っている成分は一緒だけど、石英や長石や雲母の大きさが違う。それだけの違いだそうです。御影石を見ますと灰色の部分、白っぽい石の部分、黒っぽい部分と3つで構成されていると思います。灰色の部分が珪石ですね。それから白い部分が長石です。それからあと黒いのが雲母です。額田の方には珪石工場もあるくらいで珪石の山があるんですね。100%珪石ではなく、長石や何か含まれています。岡崎の花崗岩が流れて、どこかの池、沢に積もれば風化して土になる。多分皆さんがバケツ1杯、2杯取るくらいの土は各所にあると思います。それで作りますとオリジナルな作品が作れると思います。

岡崎には矢作川があります。矢作砂と云ってホームセンターで売られています。砂を見ると白っぽい長石と、灰色の珪石、雲母が入っています。元々岩が風化されて出来たものです。初めは岩です。それが小さくなって砂利となります。それが小さくなり砂になりました。砂が更に小さくなって土になる。土の小さいのが粘土になる。自然界には粘土と砂と混じった状態でも存在しています。水を加えて洗えば粘土と砂に分けられます。粘土の取れるところにはこの砂もあるわけです。矢作川の砂は質が良いそうです。だから土建工事で買うのにもちょっと高いようです。瀬戸で取れる砂は山砂として売られています。

土木工事でセメントがあります。セメントだけではうまくいきません。砂と水を混ぜます。そうすると仕上げ塗りにするような、壁を塗れるような綺麗なモルタルが出来ます。それに、砂利を混ぜますとコンクリート。コンクリートは石ころが骨の働きをするので強くなります。陶芸の世界でもこれと同じことをやります。綺麗な良い粘土があります。それに砂を混ぜますと強くなります。珪石の粒です。骨材としての働きで強くなります。更に粒の粗い砂を混ぜますと面白くなります。強くなりますね。信楽の土は砂を含んだのがありまして良いわけです。志野を焼いている人の土は小砂のような土です。

木節粘土。これは山からずっと遠くへ流れて出来た粘土です。流れる間に木だとか草とか色んなものが入り込みます。粘土の中に炭化して腐らずに残っている木の根っこ等があります。それで木節と云います。

流れの途中で出来た粘土を蛙目粘土と云います。ガイロメと読みます。これ読める方は陶芸を良くやられてる方です。特殊な読み方をしています。蛙(がいろ)と云うのは蛙(かえる)のことで。雨の降った時、粘土に混じった石の粒が光って蛙(かえる)の目みたいに見えます。教養人になったつもりで、聞いておいてください。

五斗蒔(ごとまき)粘土。名前なんか覚えなくて良いですよ。粗い土で砂みたいな土です。これで志野のボディを作っています。

木節で大きな皿を作りますと、割れてしまう事が多いのです。割れないための必殺技もあります。木節に五斗蒔を混ぜますとかなり割れないようになります。粘土の収縮で割れるのです。だから収縮が少なくなるように粘土を焼いて粉にする。その粉を粘土に混ぜる。日本語で言いますと焼き粉、英語で言いますとシャモット(chamotte)。大きい作品を作るのであれば、シャモットの粗いのを沢山混ぜると割れない。豊田から藤岡を通過して土岐、瑞浪抜ける道に世界一と言われる大きな狛犬さんが作ってあります。その狛犬さんをよく見ますとシャモット(chamotte)焼粉が沢山入っています。それが中心で、それをひつつけるように粘土が混ぜてあるって感じですね。あまりにも大きくて動かさません。そこで狛犬さんを作って、そこの上に煉瓦で窯を作って焼きまして、窯を壊しました。動かすもんでなかったらそれで良いわけです。

陶器の重さはどうでしょうか？ 花瓶ならあまり動かさないといいですね。大皿もあまり動かさない。だから作る時、重たく作っても良いわけです。ところが手に持つ物、ご飯茶碗。重たいご飯茶碗だにご飯が

まずくなりますね。重さでいうと130グラムぐらい、150グラムになるとちょっと重たくて……。ところが150グラム、200グラムあるような茶碗も売れた時代がありました。何年も前に民芸ブームというのがありました。益子焼なんか良く売れました。その頃は分厚く作ってありました。土が悪いですから、瀬戸物よりも厚くなる必然もありました。瀬戸で飯食えんでも益子行ったら飯が食えるようになると言われてました。益子からも人間国宝が出ました。豊田の民芸館で濱田庄司の作品展をやっています。随分ダイナミックな力強い作品です。益子の土は良い土じゃないんです。綺麗な土じゃないんです。それがゆえにそれに合った装飾の仕方が生まれたようです。

岡崎に良い土がない。悲観したものではなくて、少量ならいくらでもあると思います。ちょっと離れたところには日本有数の良い土が沢山あるのです。三河土。聞いたことありますか？ 陶芸の世界では三河土で通ります。分かりやすく言いますと高浜の瓦土。煉瓦にしてる土。煉瓦・瓦に使ってるから変な土だと思いませんか？ 実際に作品を作ってみると、備前の高価な土よりも窯変が面白く出て良い土だと思います。私の作品を見て、鎌倉の方からトラックで買いにきた人がいます。気をつけないといけないのは、瓦土ですから中に木の枝がそのまま入っていたりします。高浜の土を使って陶芸作品を作っている作家もいます。表面を磨いたりしますと土の面白い味が出てまいります。この土は知られていない土だと思います。実際に土を取っているのは安城とも云われています。田んぼの下にある土です。田んぼの上の土をどかして、粘土を掘って、それから要らない土を持ってきて埋め戻す。お米を作っているよりも、土を売った方が高収入になるそうです。陶芸的な土と考えれば無尽蔵にあると云えます。

焼きの話をして。土を焼いたようなものが土器。岡崎ではざっと1万年ぐらい前から焼かれたようです。初めは野焼きです。粘土を日光で乾かして焼く。いろりで薪を燃やして生活をしているのでそこでも焼けます。炭で800℃、900℃という焼きは簡単に出来ます。一緒に芋を焼いても美味しいですね。アルミホイルでくるむと良いですね。更にそれが傷まないようにちょっと大きめの空き缶、それにつまますと芋は汚れませんね。焼き物も焼くときに汚れないようにさやにつまました。瀬戸へ行きますと通り道に色々置いてあります。窯垣の小径……。茶碗を1個焼くためにそれよりも大きな容器に入れて焼きます。今ではさやはあまり使わなくなりました。電

気で焼く場合、綺麗な状態で焼けます。ガスでも灯油でもそうです。だからさやは要らなくなりました。特殊な焼きをする為にさやを使う事もあります。大きな窯の中に棚を作り、棚に作品をのせます。沢山入りますがひとつの焼き方しか出来ません。そこでさやに作品を入れて、炭を入れ、貝殻を入れ、時には粉殻を入れて、蓋をして焼きます。面白い焼きが出来ます。

薪を燃やすよりも炭を燃やす方が強烈です。高火力を得る為には、一度木を炭にしてそれを燃やします。昔の製鉄はそうやってやってみたいです。素戔鳴尊(すさのおのみこと)がいたとか云う出雲。なんで出雲で刀が出来たんでしょうか？ 砂鉄があったんです。日本海の方、砂鉄が取れます。結構凄いです。陶芸用語では黒浜って呼んでいます。浜が黒くなっているからです。観光地ですと輪島、朝市の通りから砂浜へ降りますと浜が黒くなっています。黒っぽい砂があります。さげてみると凄い重たい。磁石を近づけますとパーッと付いてきます。それが砂鉄です。自然界で鉄は酸化して錆びた状態がありますから鉄にひついた酸素を取れば鉄オンリーになるわけです。焼き物ではそれを還元と呼びます。普通の鉄は錆びています。その錆から酸素を取れば鉄になります。いわゆる青磁と呼ばれる焼き物です。これは還元焼成です。十分酸素を供給しないで焼きます。普通の電気窯、ガス窯でもやれます。

釉薬は長石と珪石が中心です。ボディが溶けたら困るが釉薬は溶けなければなりません。良く溶けるようにする為に灰を混ぜます。だから灰だけでも釉薬になるわけです。初めに出来たのが土器ですね。焼いて温度が上げれるようになって灰が器にかかり、自然釉。面白い事を見つけました。灰を取ってそれを水で溶かし、器へ塗る釉薬が出来ようになりました。もうちょっと利口になり、他の物を混ぜるようになりました。

粘土を普通に焼いたのは陶器です。皆さんの家庭に多くあるのは大抵磁器だと思います。音が固い、薄くて白くて丈夫い。ご飯茶碗のほとんどが磁器ですね。その磁器が出来るまで瀬戸は大変繁盛していました。だから青森行っても焼き物を瀬戸物と呼びます。日本中瀬戸物で通っています。ところが有田で磁器が作られるようになりました。その磁器は秀吉さんが朝鮮から向こうの陶工を連れてきました。その陶工さんが一生懸命で磁器土を探し出し、磁器を焼けるようになりました。瀬戸は衰退して大変だったので、有田へ産業スパイを送り込みました。加藤民吉という人。民吉が瀬戸へ帰り、瀬戸でも磁器が焼かれるようになりました。磁器ってというのは

別の言い方で言いますと石物。瀬戸にはその磁器になる良い土はありません。砂婆(さば)土という花崗岩の風化して出来た土を利用して磁器系の焼きをしました。美濃の方ではそれを砂婆(さば)土と言わずに藻珪と呼んでいます。それに従来の本節粘土を混ぜて硬い焼き物を作るようになりました。

うちにきてる会員さんで、珪石工場に知人がいまして、山に出入り出来るんです。そこで粘土を取ったと言って土を持ってきました。そのままで焼きましたら磁器みたいな良い焼き物が出来ました。その斜面のじわじわ水の出るところに粘土が出来る条件があるようです。そこに溜まってたちょっとの土。バケツ1杯もありません。それは成功しました。「あれは良かった。」と次に持って来ましたが全然ダメでした。その土は珪石の風化しかけの物でパサパサでした。岡崎の大地は花崗岩ですから良い土の出る可能性はあるということです。岡崎の遺跡、古いものの中には瀬戸、猿投にも匹敵するようなものも混じってると思います。ただ土は大量には出てないので産業にはならなかった。趣味の範囲においては一向に差し支えないだろうと思います。

先程の甲山焼(こうざんやき)ですね。甲山焼(かぶとやまやき)ですね。加藤民吉さんが瀬戸に帰り磁器の時代になってしばらくしてからの事。今年滝町に窯跡があるのが見つかりました。4月から7月までかかって掘ったそうです。ここは滝山寺の寺の範囲内で滝山寺の窯だったと言われています。そこにはもう磁器が入っています。瀬戸へ伝わってから20年くらい、しばらくしてからの製品です。初めに窯が見つかった時、永楽さんがきた時の試し焼きの窯かと思われたようです。だけど作られている製品を見ますと、全然別の系統だったようです。

配りましたプリントにミスプリントがあります。裏の方の2行目「安南写、仁清写、伊賀、信東」となっています。「東」じゃなくて「楽」、「信楽」です。甲山焼(かぶとやまやき)は、大体5つの時期に区分出来ると思います。はじめの物の多くは江戸へ運ばれました。江戸の三井家。そのスポンサーによって一生懸命さばかれました。三井さんが大スポンサーとしてついていたのです。だからこの時代の良い物が岡崎には少ない。永楽印は後の時代でもずっと押されています。2番目は和全風踏襲時代。明治5年から9年、大変短い期間でした。和全風を伝えて、優秀な弟子が踏襲して作られた時代がありました。これが明治9年から15年くらい。それから岡崎永楽復興時代。明治22年から25年。ずっと後になって初めて甲山焼(かぶとやまやき)という名前が使われました。それから今度は明治25年から名古屋で

名古屋甲山と言われるものが作られたということです。

昭和25年11月3日の東海新聞に池上年さんが書いた文章、大変まとまって上手に書かれていると思います。一部読ませていただきます。

岡崎における永楽和全の作品を岡崎永楽という。その当時は甲山焼(かぶとやまやき)とは言わなかった。甲山焼(かぶとやまやき)という名前は明治22年、松原宗太郎の初めて提唱したもの。甲山焼(かぶとやまやき)を鑑賞するには、まずその大体の歴史を知る必要がある。それは5期に分かつのが最も適当であろう。

1、永楽和全指導製作時代。和全が岡崎にきたのは明治5年6月で、当時和全は50歳であった。来岡後5ヵ月ぐらいで一度京都に帰り、翌年夏再びきている。当時義弟宗三郎は大阪にいたが、明治9年1月死没したので得全は途方に暮れついに和全を岡崎から呼び寄せることにした。この間満3年強、和全は多方面にわたる名工であるから、製作した焼き物の範囲は非常に広く、染付、赤絵、金襴手、鉄砂金、銀象眼、絵高麗、安南、仁清写、伊賀、信楽等より、青磁まで焼いている。この頃の作には大概丸の中に永楽の2文字ある刻印が用いられている。

2、和全風踏襲時代。和全の去った後は一切を花屋吉兵衛、通称花吉が引き受け、しばらくの間、同じところで同じ方法で製作を続け、瀬戸から陶事師を招き、花吉は平田とともに和全風の陶磁器を作っていた。それが明治15年頃まで続いた。花吉は萬古の職人であり、平田は和全の愛弟子であったため、その頃の作品は和全作とちょっとも区別が付きがたいものがある。

3、岡崎永楽復興時代。岡崎永楽がしばらく絶えたので、明治17年、塚本利三郎、佐藤良顕両名の合同にて窯を開くこととし、土は各地から取り、平田の絵付けで永楽風の陶磁器を作り、岡崎永楽として復興を企てた。土は最初は大部分を市之倉から取り、これに瀬戸、名古屋のものを加え、時には支那のものを用いた。この時、鷹部屋雲城、中根雪窓等も参加した。焼き物の種類は赤絵が主で、文人の書画などを染め付けたものもある。

4、甲山焼(かぶとやまやき)の出現。岡崎永楽が沈滞した頃、当時岡崎出身で海外旅行を成し、その紀行と帝国の使命を論じて一時に名声を博した志賀重昂に意見を求めたところ、茶器等の美術品を作るよりも日常の器物を作って、広く天下に需要を求めた方が良いとのことで、遂にその意見を採用し、その当時各地より素地を輸入し、絵付けだけをする方法に再検討を加え、職工を招き再び土の製作より出発

する計画の元に、明治22年岡崎市連尺町、松原宗太郎は、元の女学校の寄宿舎の辺りに、3袋ばかりの登り窯を築き、瀬戸から陶事師を呼び、例によって平田の絵付けで和全の作風を踏襲した作品をつくり、この時初めて甲山焼と命名した。楕円の中に甲山と彫った印を用い、また永楽の印も用いた。大藤氏蔵の甲山焼にコーヒー茶碗6人分の小型のものがある。水金の鳥の模様は平田の絵付けで、裏に「大日本甲山製」とある。松原木仙が輸出向きの為に試作したものであろう。この窯は明治25年に廃業となった。

5、名古屋甲山。甲山焼が廃窯になると平田は間もなく名古屋に移り、熱田の三本松付近にて瀬戸の素地を用いて絵付けを成し、永楽または甲山焼等の名をもって数年やっていた。魁鉢の魁の字の代わりに桜花の中に形の字を入れた。彼の花形の鰻井の鉢などはこの時の作で、研究者はこの時代のものを名古屋甲山と呼んでいる。

このような歴史です。大正4年に岡崎市式典の時、瀬戸で焼いた甲山焼（かぶとやまやき）が記念品で配られたとのこと。岡崎の甲山焼（かぶとやまやき）は流れから言いますと、京焼です。京都の焼き物です。岡崎で岡崎独自の焼き物には至りませんでした。明治の時代に、岡崎の先輩が当代一流の人を呼んで作りました。心意気と言いますか、何か凄イと思うわけです。

面白そうな土があったらポリ袋に入れて持ち帰ってください。大きなバケツに入れて、水を加えかき混ぜてください。大変愛用している良い道具をお持ちしました。裏ごしです。これ通すと、ゴミ、砂利が残ります。これは捨てます。下へ置いといたバケツの中に、この目より小さい土が残ります。上水を捨てて、乾かせば粘土が出来る。オリジナルなものです。更に細かくしたかったら茶こしを通します。クラブでは釉薬を濾すのに使っています。台所用品として大量に作られていますから質が良くても安いんです。

後は焼きですね。炭火コンロを使います。ヘアードライヤーを使い風を送ってやればバーツと炭が燃えてかなり高温の焼き物が出来ます。その上に植木鉢でもかけますと熱が逃げません。安く遊べます。あなたの見つけた土は、自分だけの物です。

瀬戸や信楽よりも良い土はなかなかありません。今は良い土が練ってあり、すぐ使える状態で安く手に入る時代です。旅行に行きまして、土を取りまして自宅へ宅急便で送ります。その料金だけでちゃんと練って使える良い土が買える時代です。それから日本中の土は電話1本で自宅まで届きます。

成形したものを800℃で焼き釉薬をかけます。釉薬の研究は大学の研究費でやりました。今は皆さんからいただいている会費を全部そちらへ使っているものですから、大学の研究費よりもずっと多くなっています。釉薬は沢山溜まりまして、その釉薬置き場に困りまして、40坪の建物を自分で造っています。カーマ、ジャンボエンチャーで材料を買い、車で運んでいます。

クラブは年中無休です。定年退職者で家において、粗大ゴミにならなくてもすみます。家族仲良く一緒に来れるように家族会員制です。ひとりの会費で1家族何人きても良いシステムです。クラブには蕎麦打ちの名人や芋煮の名人もいます。クラブの畑で出来た蕎麦を使って蕎麦会をやります。大人ですから世話は要りません。皆さんがそれぞれに生きてこられた人生の達人です。だからいろいろな能力があります。

いち焼きもあるし、いち土もあるし、わからないですね。自然とともに生きていく事が大切かと思っています。ご静聴ありがとうございました。